

「固定化された性別だけでなく、きちんと性と向き合うことの大切さ」

国際医療福祉大学 大学院 在宅看護学専攻

木村 夏紀

見た目が男だから、女だから、こうでなくてはならない、という固定概念が日本ではすごく強いと感じます。

固定化された性別に対する考え方の偏りは、近年、テレビにジェンダーフリーな方々が出るようになってから少しずつ緩和されているように感じますが、根本的な部分は根強く残っています。

なぜ、見た目や体の作りだけで判断されなければならないのか。

Trans gender の介護職員のいる職場に時折仕事で行きますが、彼女(もとは男性)はセクシュアリティに関係なく、好きな女性と結婚しています。

理解のある職場であるため、女性同士という関係をオープンにしても、職員はあたたかく見守っています。

普通の家庭であり、子どももいます。

男性として生まれても、心は女性であったため、彼女は現在女性です。髪も長く伸ばし、化粧をして女性として仕事を全うしています。

一部はそういった理解のある環境がありますが、一般的には公にすることをためらう人が多くいます。親にすら言えない現状があります。

自分をきちんと受け入れられるような早期な関わりがあるかないかで、その人の人生に大きく関係するため、精神的な部分での支援がとても大切です。

表出できる環境があるだけで、他の人と違う感覚を持っていることは恥ずかしいことではなく、人それぞれの感覚の違いなのだという、認識の違いが明らかになります。

「自分らしくありたい」

誰もが望むことではないでしょうか。

社会的な考えを押し付けられ、左右されるのではなく、ありのままの表出ができるような社会が必要であることを、講義を通して考えさせられました。

セクシュアリティに関係なく暮らせるよう、様々な取り組みがなされていることも改めて学びました。全ての人びとが平等に暮らせるよう、今後もより社会全体の理解が進むような取り組みがさらに進展することを期待しております。

本日は貴重なお話をありがとうございました。